

## 第3章 協同学習とは

### 1 協同学習とは何か

協同学習は、「生徒たち同士や生徒たち教師との相互のコミュニケーションを促し、共通の問題解決を目指してお互いの考えを積極的に出し合うことで、学習内容の理解・習得や新たな創造や発見を行う」という話し合いや助け合いを中心とした授業づくりです。その学習の中で、協同学習で学ぶ意義について気づき、協同学習で学ぶ方法を身につけることが求められています。

他者との協同学習を通して、多様な考え方と出会い、対象（教材）との新たな出会いと対話を実現して、自らの思考を吟味することができます。そのため、協同学習を成立させるポイントは「聴き合う関係」を基盤とする対話的コミュニケーションにあると言えます。

### 2 協同学習の授業づくり

協同学習を行うためには、「学びの共同体（運命共同体、ラーニング・コミュニティ）」として生徒集団を組織する必要があります。どのような組織なのかは後述しますが、次のことを意識してグルーピングするとよいそうです。

#### ■ 集団づくり

- ・ 小集団（少人数、2～6名）によるグループにする。
- ・ 一定の条件を満たしたグループ（実態に近い生徒同士）が適している。
- ・ 実態差があっても、メンバーの成長を願いながら授業に臨むならば、それは協同学習であると言える。
- ・ それゆえ、生徒の学力レベルやソーシャルスキルを踏まえて、系統的に異質なグループ（学力、社会性など異なる要素を持つメンバーで構成）を作ることもありとする研究者もいる。

協同学習の授業は、個人思考（個人で考える活動）と集団思考（グループやペアで考える活動）を適切に組み合わせて計画・展開することが必要です。その代表的なパターンは次のとおりです。

#### ■ 授業の展開例

- 例1：個人思考 → 集団思考 → 個人思考（各自振り返りをする）
- 例2：個人思考 → 集団思考 → 集団思考（集団全体で対話する）
- 例3：集団思考 → 個人思考（一人でもできるようになる）

さらに具体的に、協同学習の進め方（授業の組み立て方）を8つのステップで紹介されている文献もあります。その8ステップは次のとおりです。

#### ■ 8ステップ

- ステップ1：グループの授業の目的を決める（示す）。
- ステップ2：生徒をグループに分ける。
- ステップ3：役割を割り当てる。
- ステップ4：個人の目標を決める。
- ステップ5：教材（の工夫）
- ステップ6：指導するスキルを決める。
- ステップ7：どのようにグループを維持するか計画する。
- ステップ8：教師のコメントとフィードバックをする。

### 3 特別支援教育（知的障がい教育）における協同学習

知的障がい教育において協同学習を行う際には、次のことがポイントになると思われます。これは、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校の実践で整理されたもの（清水笛子，2013）で、後述する「協同学習の5要素」と重複している部分もあります。

- ・全員にしっかりと役割を持たせること
- ・互いにしっかりと向き合って支え合わせる
- ・与えられた役割を果たせるように、互いに努力し合うこと
- ・経過と成果（結果）を繰り返し振り返らせ、確認させること
- ・以上の機会を通して、その場にふさわしい言動や態度を学ばせること
- ・理解しやすく学びやすい、活動に取り組みやすい環境をつくること
- ・一人一人の理解能力や技能を補うための自助具などの補助的手段を用意すること

知的に障がいのある生徒は、理解力や記憶力に課題があり、学習に対する苦手意識があります。そのため、苦手意識を軽くするような学習の動機付けが必要になりますが、例えば次のようなものだと考えられます。

- ・学習内容を生徒の身近な生活と結びつけて扱うこと
- ・生徒の学習や活動の良さを見出し、タイミングよくほめること

また、適切な指導・支援がなされなかったがゆえに、誤学習となり、やがて意欲が低下して未学習となっていくことも懸念されます。すると、次のような働きかけや工夫が必要であるとも考えられます。

- ・教師や仲間からの個別の評価を得られやすくすること  
（それによって適切な学習のフィードバックをさせること）
- ・見通しを持つ一活動する一評価する（自己・他者）の一連の流れを繰り返すこと  
（それによって自身や集団の成長に気づかせること）

## 4 協同学習の5要素

協同学習の基本要素として、以下の5つがあります。学習集団の成長の状況や授業のねらいに応じて、基本的に5つの要素を取り入れる必要があります。

ただし、協同学習は授業のねらいや内容・授業展開に応じて取り入れるのが望ましいため、5つすべての要素を取り入れない方がよい場合というもあり得ます。そのようなときは、該当する要素のみを取り入れて授業を組み立てるのがよいでしょう。

5要素	解説・例
①互恵的な相互依存関係	<p>すべてのメンバーは共有した目標に向かって一緒に取り組む（互いに協力を必要とする）という『運命共同体』の関係を作ること。全員が協力しないとできないような関係を設定すること。</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全員で共通の一つの問題を解く（課題をクリアする）</li> <li>・班で各自が自分の役割を果たし、協力して一つのものを作る</li> </ul>
②対面的なやりとり	<p>教え合う、助け合う、議論する、評価し合うなど、互いの学習を促進し合う機会を設定すること。</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・問題がわかった生徒は、わからない生徒に解き方を教える</li> <li>・全員が意見を出し、話し合っ一つ意見にまとめる</li> <li>・発表者のよかった点を褒め合う（改善策を助言し合う）</li> </ul>
③個人としての責任	<p>個々のやるべき役割をはっきりさせること。自分がやらなくても誰かがやってくれるという状態を作らないこと。そうすることで、役割を果たし、個人目標を達成できるようにすること。</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いで、司会、記録、要約、発表などの役割を与える</li> <li>・班で活動する際、全員必ず1回は〇〇すると条件をつける</li> </ul>
④協同学習スキル	<p>質の高い協力ができるように、必要なスキルを指導すること。どのスキルを指導するかは、13ページ以降の一覧より、ねらいに即して選んでください。</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師がモデリングして適切な方法を伝える</li> <li>・どのようにしたら適切か、相手や場面を踏まえて考えさせる</li> </ul>
⑤チームの振り返り	<p>どのように援助し合ったり、協力し合ったりしたらよかったかなどを振り返る機会を設定すること。ただし、協同学習に慣れてきてから導入するとよい。</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りシートを使い、自分たちの話し合いを評価する</li> <li>・うまくできていた例を生徒に伝える（教師によるフィードバック）</li> </ul>

協同学習の進め方（授業の組み立て方）を8つのステップで紹介されている文献があると先述しましたが、それとこの5要素を組み合わせると、次のようになるかと思われます。

進め方8ステップ			5要素との関連				
STEP	教師の活動	方法	①	②	③	④	⑤
1	授業の目標の決定	互いの協力を必要とする（協力によって達成できる）目標を設定する。 （例）・全員で問題1を解く ・班で〇〇を～～まで完成させる	○				
2	グループ分け	生徒相互の学習を促進し合うことができるようなグループを設定する。 （例）・得意な生徒と苦手な生徒を同じ班にする ・実態の近い生徒でグルーピングする		○			
3	役割の割り当て	役割を割り当てることで、グループ活動の間、課題に対する責任を持たせる。 （例）・教師が役割を指定する ・自分にあった役割を生徒に選ばせる			○		
4	個人の目標の決定	何を目標にして取り組むか明確にする。教師はそれを基準に生徒の学習状況を把握する。 （例）・教師が個別の本時の目標を立てる ・生徒各自に本時の目標を立てさせる			○		
5	教材の工夫	※教材のつくりによって、5要素のどれに該当するかが変わります。 （例）・協力して壁新聞を作るという教材を用意する…①の要素 ・話し合いや教え合いで学習が促進される教材を用意する…②の要素					
6	協同学習スキルの指導	授業のねらいや個人の課題に応じて、どのスキルを指導するか決めておいて、授業内で指導・助言する。				○	
7	グループの維持	グループを巡回し、どんな協同学習スキルを使っているか記録しつつ、グループまたは個別に必要な協同学習スキルの指導をする。				○	
8	コメントとフィードバック（振り返り）	生徒はグループがどのように機能していたか教師にコメントを求め、教師はグループと振り返りを共有する。					○

## 5 協同学習の取り入れ方

ここまで協同学習の重要な部分について説明してきましたが、授業のすべてを協同学習にすればいいというわけではありません。単元を計画する際、個別に基礎知識を学習したり、個人でパソコンを使って調べ学習したりといった授業を組み入れる必要性のある場合もあるはずです。また、入学して間もないうちは、集団の成長が十分でない場合もあるはずです。協同学習は、授業のねらいや内容・授業展開に応じて取り入れるのが望ましいのです。

## 6 協同学習における配慮事項

協同学習を行うに当たって、いくつかの配慮事項があります。協同学習では、先述のとおり5つの要素を盛り込んだ授業を構成することが鍵となりますが、それに加えて、以下の配慮事項を盛り込んで授業をすることによって、より協同学習による教育効果を向上させることができると考えられています。

協同学習ではなくても、配慮して当然と言えることも含まれていますが、授業のねらいや展開に合わせて、適切な配慮事項を選び、授業内で配慮を実践していくことが求められます。授業の中のある活動（展開）が、5つの要素のうちどの要素を意識したものなのかをしっかりと押さえ、その活動（展開）においてどのような配慮をすることでよりねらいを達成できるか、というように考えて授業づくりをしていくとよいかと思われまます。

### (1) 単元、授業を構成する上での配慮事項

- ① 生徒の特性を考慮し、学習課題につながりがあるよう連続的に構成し、同じ学習課題の設定と構成を単元の中でできるだけ繰り返し、徐々に学習内容の量と質を高めていく。
- ② メンバーの遂行能力、数的処理能力、グループの人数などに配慮して、チームや個々人の達成目標（行動）を設定する。  
→注意：課題に対する学習の困難度が高い生徒が、周りの生徒の手助けで達成できそうな目標を設定する。
- ③ 生徒一人一人の「学び方の違い」を前提とした授業の進め方を考える。  
→例1：ヒントカードやワークシートを自己選択させるなど、子どもの理解レベルに合わせた支援方法を準備する。  
→例2：基本課題と発展課題を用意する。

### (2) チーム（グループ）に対する配慮事項

- ① チーム内の仲間関係に常に注意を払っておく。  
→例：チーム内の成績の悪いメンバーへの攻撃を回避する。一人一人が積極的にチームに貢献できるような目標設定を心掛ける。
- ② チームに同調することが強制されないように注意を払う。  
→例1：意見がぶつかり合って、話し合って解決する過程を重視する。  
→例2：相手の意見を尊重しながら自己主張する話し方を指導する。
- ③ チームや個々人の目標達成までの遂行状況を逐次フィードバックする。つまり、チーム内の協力を促進するために、誰が手助けが必要なのかを見て分かるようにする。  
→例1：体育の陸上競技の授業で自己ベストをクラス全員が更新することを目標にした授業では更新できた者は体操帽を赤、未達成の者は白とする。  
→例2：黒板に生徒の名札カードを貼って、課題ができた人は右側に移す。（「一人はみんなのため、みんなは一人のため。」の精神で）

### (3) 授業中の配慮事項

- ① 協同学習スキルを実際に活用できるように指導場面を物理的に構造化する。  
→例1：協同スキルを実施する相手を限定する。  
→例2：立ち位置に足形のマークを貼る。  
→例3：机の配置を話しやすいように向かい合わせる。（生徒が関わりやすい物理的な環境を整える）
- ② 生徒が互恵的相互依存関係を理解しているか、指導前と指導中に理解の状況を把握・確認する。  
→例：助け合ったり、教え合ったりして良いと伝えているのに、納得していないために行動化しないことがあれば、助け合ったり教え合ったりして良いことを確認する。
- ③ 生徒が思っていることや考えていることについて、的確に言えない場合には、望ましい言い方の例を代弁して話しかけ、その後、生徒自ら話すように促す。生徒同士のやり取りが成立するように配慮する。
- ④ 教師は生徒の学習の成果はもとより学習過程における努力をみとり、タイミング良く生徒に伝えてほめる。また、間違ったり失敗したりしたことを学習にとって重要なステップと捉え、それらを否定することなく認める。
- ⑤ メンバー全員が達成感を感じられるほめ方を工夫する。  
→例1：賞状一枚で班のメンバー全員が達成感を感じられる場合は1枚のみとする。  
→例2：一人一人に渡された方が達成感が強いなら、人数分の賞状を用意する。  
→例3：言葉による称賛と承認が達成感を満たすなら、その方法を採用する。

### (4) その他、視覚的な配慮事項

- ① 授業の始めに活動の全体像（流れ）を視覚的に示し、その授業で何をするかの見通しを生徒が持てるようにする。また、授業の進行に合わせて、いまどこをしているか、どこで終わるか、終わったらどうするかを明示する。
- ② プロジェクターや大型テレビなどの ICT 機器やホワイトボードなどを活用して、授業のポイントを視覚的に分かりやすく提示する。  
→例1：黒板には全体の流れを示し、大型テレビにはその時点で重要な事項を表示しておくことにより、作業の計画や必要な方略を見通しやすくなる。  
→例2：書いた文章や図などを修正しやすい教具（ホワイトボードなど）を活用する。
- ③ 授業展開に沿ったワークシートを用意し、視覚的な教材・教具や板書と連動させて、生徒にとって分かりやすく、見て確認できるようにする。
- ④ 授業の流れに沿ってノートを書かせたり、書き込んだワークシートを貼付したりすることでその時間のノートができ上がるよう工夫し、情報を適切に整理してまとめることを促す。

## 7 協同学習スキル

協同学習を行うにあたって、質の高い協力ができるように、いくつかの協同学習スキルを指導する場面を設けることが、5要素のうちの4つ目にありました。では、その協同学習スキルとはどんなものがあるのか、ここで御紹介したいと思います。

なお、「考えるスキル」は寺嶋ほか（2013）による「小学校学習指導要領に基づく思考力・表現力育成のための目標リスト」から引用し、「集団で生活するスキル」と「コミュニケーションスキル」は茨城県教育研修センター（2005）の「学校生活スキル尺度」から適宜引用してあります。

### (1) 考えるスキル

#### (小学校段階)

- 1 知っていることや調べたことをもとに、結果を予想することができる。（推論する）
- 2 他の人の気持ちを予想することができる。（推測する）
- 3 もの（こと）のようすを予想することができる。（推測する）
- 4 自分なりの見方で、何かについて考えることができる。（着目する）
- 5 一つのもの（こと）をさまざまな視点から考えることができる。（多面的にみる）
- 6 一つのもの（こと）を全体的に見渡して考えることができる。（概観する）
- 7 自分なりの見方で、観察することができる。（観察する）
- 8 二つのもの（こと）の同じところや違うところを比べることができる。（比較する）
- 9 いろいろなもの（こと）を、いくつかに分けて整理することができる。（区別、整理、分類する）
- 10 いろいろなもの（こと）を順序に沿って整理することができる。（整理する）
- 11 条件に応じて、いろいろ試したり考えたりすることができる。（変える）
- 12 起きていることの原因について考えることができる。（関係づける）
- 13 学んだことを普段の生活に関係付けて考えることができる。（関係づける）
- 14 もの（こと）の内容やしくみを明らかにすることができる。（分析する）
- 15 何かを調べたりまとめたりするときに、いくつかの中からぴったりの方法を選ぶことができる。（選択する）
- 16 何かをまとめるときに、多くの情報から自分に必要なものを選ぶことができる。（選択する）
- 17 色々な方法で、答えを確かめようとすることができる。（確かめる）
- 18 表現や内容について、意見や感想を持つことができる。（評価する）
- 19 必要なもの（こと）をよく調べたり、考えたりして、選ぶことができる。（吟味する）
- 20 もの（こと）を明らかにするために、しっかりと考えることができる。（考察する）

### (2) 集団で生活するスキル（集団活動スキル）

#### (小学校段階)

- 1 暴力をふるったり人を傷つけることを言う前に、一度止まって考えることができる。
- 2 授業中むだ話をしないで、先生の言うことに集中できる。
- 3 相手の立場に立って考えてみることができる。
- 4 先生や友だちが話しているとき、きちんと聞くことができる。
- 5 まちがいがあつたとき、素直に謝ることができる。

- 6 人や自分が失敗しても許すことができる。
- 7 注意されたとき、自分の行動に問題があったかどうか考えることができる。
- 8 集団で行動するとき、自分の番がくるまで待つことができる。
- 9 他者を励ますことができる。

#### (中学校段階)

- 10 自分の知りたいことを聞くことができる。
- 11 相手の立場に立って考えてみることができる。
- 12 注意されたとき、自分の行動に問題があったかどうか考えることができる。

### (3) コミュニケーションスキル

#### (小学校段階)

- 1 人にどう話しかけたらいいのか、どう会話を始めたらいいのか知っている。
- 2 うなずきながら、相づちをうちながら笑顔で聴くことができる。
- 3 どのような発言や態度であっても、馬鹿にした態度をしない。それに対して、説明を求めたり、質問をしたりすることができる。
- 4 聞かれたことを理解し、それに対してきちんと答えることができる。(応答する)
- 5 友だちの発表したことや書いたことに対して、アドバイスをすることができる。(助言する)
- 6 相手の立場に立って、もの(こと)を提案することができる。(提案する)
- 7 ねらいに応じて、課題をもって取材することができる。(取材する)
- 8 よく聞いて、分からないことや確かめたいことを質問することができる。(質問する)
- 9 見たことや知らせたいことについて、必要なことをおとさないで、人に伝えることができる。(紹介する)
- 10 必要なことについてまわりの人と連絡をし合うことができる。(連絡する)
- 11 体験したことや考えたことを記録し、報告することができる。(報告する)
- 12 話したいことをしぼって、もの(こと)の理由を説明することができる。(説明する)
- 13 自分の意見を主張することができる。(主張する)
- 14 自分の考えを明らかにして相手にわかってもらうことができる。(説得する)
- 15 何かを伝えるとき、相手に分かりやすい内容で組み立てることができる。(構成する)
- 16 必要な資料を自分なりに必要なかたちにするすることができる。(加工する)
- 17 自分の考えを伝えるために、文章や資料をわかりやすいかたちにするることができる。(編集する)
- 18 自分の考えをまとめることができる。(まとめる)
- 19 みんなの考えを一つにまとめて表すことができる。(まとめる)

#### (中学校段階)

- 20 異性と自然に話すことができる。
- 21 自分の感情を表現する方法を知っている。
- 22 仲のよい友だち同士がけんかしているとき、どうしたらいいのか知っている。
- 23 友だちの話を相手の身になって聞くことができる。
- 24 自分の嫌なことを断ることができる。

(高校段階)

- 25 友だちに自分の考えを打ち明けることができる。
- 26 自分の悩みを誰かに相談できる。
- 27 人との会話の中で、話を広げていくことができる。
- 28 人に対して、自分から話し掛けていくことができる。
- 29 友だちの相談にのることができる。
- 30 異性と自然に話すことができる。
- 31 困ったとき、誰かに手助けを頼むことができる。
- 32 自分の知りたいことを聞くことができる。
- 33 タイミングを見て、相手の気持ちを考えて、自分の考えや気持ちを伝える。
- 34 友だち同士がけんかをしている時、間に入り仲を取り持つことができる。
- 35 その場の雰囲気に合わせて行動することができる。
- 36 友だちとの仲がこじれたとき、どうしたらよいか知っている。
- 37 互いの感情や意見の違いを認めながら調整しようとする。
- 38 友達の個性や長所に気付くことができる。
- 39 友だちとの関係から自分の個性や長所に気付くことができる。
- 40 話し合いの方向性を与え、問題や課題の解決策をみんなで考えることができる。



## 第4章 本校の取り組み

### 1 協同学習を始めた経緯

本校では進路指導部が中心となり、卒業後の生徒のフォローアップを続けています。進路指導部が実施した調査により、卒業した生徒の姿の一端が見えるようになりました。以前の研究で行われた調査では、卒業後の生徒が困っていることに「障がい受容の不足」「コミュニケーション能力の不足」「性の指導（異性関係の課題）」「自己認知」が挙げられていました。

特に、どの調査事例でも共通して「コミュニケーション能力の不足」が挙げられていました。具体的には「言葉などによるコミュニケーションを学ぶ機会を逸してきた。」「他人との関係を従属的（強い者に従ってしまう）、共依存的（自分を守るために特定の人にもみ関わる）でしか築くことができない。」などが示されてきました。ここにはコミュニケーション能力のみならず、自分に対する自信のなさ、評価の低さも関係していると考えられます。

このことから、授業改善の方法として「協同学習」という学習方法を授業に取り入れることで、生徒は苦手意識をもつことなく、コミュニケーション能力や他者と関わる力を高め、キャリア発達を促すことができるのではないかとという仮説がまとめられ、校内研究として3年間取り組むこととしました。これが、本校における協同学習の導入の経緯です。

### 2 研究の進め方

1年次は、意図的に授業に協同学習を取り入れて、課題解決へ向けた指導法を検討するという目的で、全員が協同学習を取り入れた授業を行いました。その結果、生徒同士の関わりが増え、コミュニケーションが増えるという成果が表れました。その一方、生徒の実態差によって理解力や行動力のある生徒が活動を主導しやすくなり、活動に時間がかかる生徒が受け身で学習するようになるという課題が明らかとなりました。また、教職員からは、協同学習の理解が難しく、授業にどのように取り入れてよいのかが分からないという声も多数挙がっていました。

これを受けて2年次は、協同学習の5つの要素や協同学習スキル、配慮事項などをまとめた「協同学習授業マニュアル」を作成しました。これをもとに、教職員でグループを組み、各教科・形態に適した協同学習の取り入れ方の検討及び課題解決に向けた指導法の検討を重ねました。その結果、協同学習の5つの要素を取り入れた数が大幅に増加し、生徒自身が役割を果たしたり、仲間を意識したりして学習活動に取り組む様子が増えました。一方で、1時間の授業の中に5つの要素すべてを取り入れることができている授業や個別の課題を解決するための指導がうまくできないこともありました。

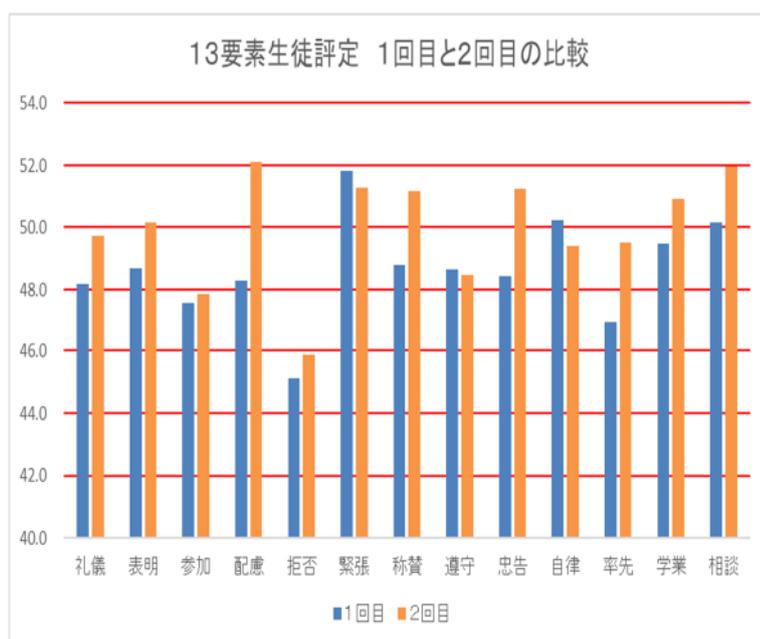
このように、効果的な協同学習によって生徒の成長に結びついたこともありましたが、協同学習の考え方に基づく授業の設計が不完全な内容であるがゆえ、生徒個々の課題に対して十分な指導ができなかったこともありました。そこで3年次は、生徒個々の課題や集団の状況、単元・題材や授業のねらいなどと協同学習の5つの要素を照らし合わせた上での授業づくり、協同学習の5つの要素すべてを効果的に取り入れつつ、個々の課題に応じた指導ができる授業づくりを目指し、全員が研究授業に取り組むことにしました。このことにより、課題解決力やコミュニケーション力の伸長、すなわちキャリア発達を促すことができるのではないかと考えました。また、学習会を開いたり、前年度作成した「協同学習授業マニュアル」をより分かりやすい形で改訂するなどして、目的を達成できるよう一丸となって取り組みました。

### 3 成果と課題

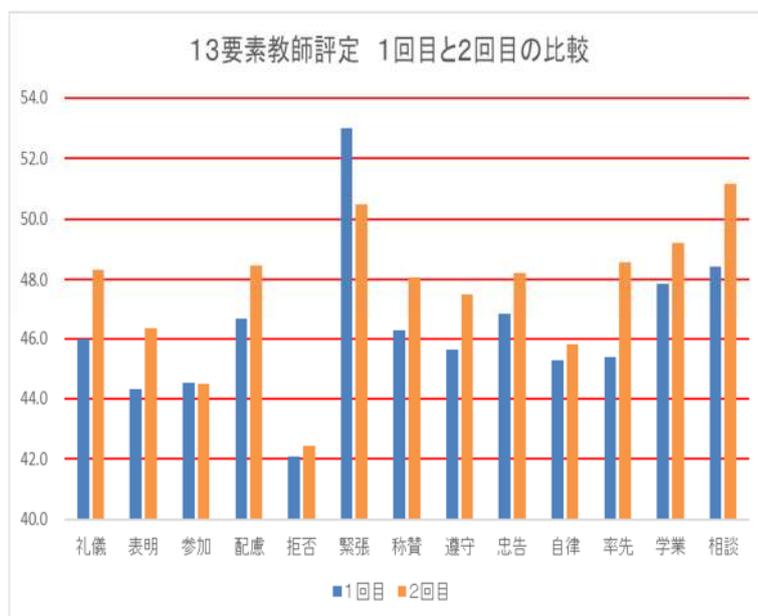
協同学習によってどれだけ生徒のコミュニケーション能力が向上したのかを確かめるために、在校生と担任を対象に調査を行いました。それは、北海道教育委員会と北海道医療大学が共同で開発した子ども理解支援ツール「ほっと 2014」の実施です。「振り返りシート」と呼ばれるシートに記載された 21 項目の質問に生徒と教師が回答し、データ入力（集計）することで、その生徒のコミュニケーションに関わる力（13 要素、下表参照）がどの程度か分かります。

13 要素		略称	要素の説明 (コミュニケーションスキル)
1	挨拶や感謝	礼儀	挨拶や「してもらったこと」への感謝ができる
2	発言や説明	表明	意見や欲求を主張できる
3	仲間づくり	参加	対人参加や、仲間と協調することができる
4	思いやり	配慮	相手への配慮や親切、援助ができる
5	拒否	拒否	断ることや、他者から無理な働きかけにやめると言える
6	緊張	緊張	緊張や不安によって話せなくなることがある
7	称賛	称賛	相手を褒めたり喜ばせたりすることができる
8	ルールやモラル	遵守	規律や秩序を維持したり、不適切な行為を謝罪できる
9	助言や注意	忠告	社会的な望ましさを促進する働きかけができる
10	自律	自律	協調性や我慢などの自律的な行動ができる
11	リーダーシップ	率先	集団をまとめることなどリーダーシップ行動ができる
12	学業	学業	学習に関連した望ましい行動ができる
13	相談	相談	相談や自己開示ができる

(表 「ほっと 2014」で測ることのできるコミュニケーション 13 要素)



13要素	1回目	2回目	2回目-1回目
礼儀	48.2	49.7	1.6
表明	48.7	50.2	1.5
参加	47.6	47.9	0.3
配慮	48.3	52.1	3.8
拒否	45.1	45.9	0.7
緊張	51.8	51.3	-0.5
称賛	48.8	51.2	2.4
遵守	48.6	48.5	-0.2
忠告	48.4	51.2	2.8
自律	50.2	49.4	-0.8
率先	47.0	49.5	2.5
学業	49.5	50.9	1.5
相談	50.2	52.0	1.8



13要素	1回目	2回目	2回目-1回目
礼儀	46.0	48.3	2.3
表明	44.3	46.3	2.0
参加	44.5	44.5	0.0
配慮	46.7	48.4	1.8
拒否	42.1	42.4	0.3
緊張	53.0	50.5	-2.5
称賛	46.3	48.1	1.8
遵守	45.6	47.5	1.9
忠告	46.9	48.2	1.4
自律	45.3	45.8	0.5
率先	45.4	48.6	3.2
学業	47.9	49.2	1.4
相談	48.4	51.2	2.7

(図表 「ほっと2014」の実施結果)

図表は、生徒評定（生徒が振り返りシートに回答した自己評価）と教師評定（担任がその生徒の振り返りシートを添削した他者評価）のまとめです。1回目の調査は、協同学習による授業がその年まだあまり行われていない時期である平成29年6月に、2回目の調査は協同学習による授業がたくさん行われた後の時期である同年12月に実施しました。

この結果を見ると、生徒評定、教師評定いずれも同様の傾向にあり、生徒評定の方が高い数値を示しています。つまり、生徒の過大評価あるいは教師の過小評価があることがうかがえます。しかしながら、1回目より2回目の方が生徒評定、教師評定ともに高い数値となっていることから、コミュニケーション力の全体的な底上げがなされてきたものと読み取ることができ、協同学習による効果があったことが見て取れます。

一方で、課題もあります。この「ほっと2014」では、基準となる偏差値は50とされていますが、2回目の調査の時点でこの50を上回った要素は生徒評定では7要素、教師評定では2要素にとどまり、しかもいずれもわずかに上回った程度です。ちなみに、調査の際に用いる「振り返りシート」は中学生用を用いていますので、この調査で測ることのできるコミュニケーション能力は中学生の平均以下であるということが言えます。今後は、高評価・低評価の項目を分析し、そこに特化した指導・授業を工夫するとともに、さらにその授業の中で協同学習を取り入れていくことによって、コミュニケーション能力はまだまだ伸ばすことが可能であると考えています。

例えば、2回の調査でいずれにおいても、生徒評定、教師評定ともに偏差値50を上回ったのは「緊張」で、すなわち「緊張や不安によって話せなくなることがある、ということはあまりない生徒の方が若干多い」ということを示しています。今後、こうした生徒を増やしていくためには、協同学習によって発言の役割を当てたり、話し合う機会や発表の場面を設けたりするなどの工夫を増やしていくことが有効ではないかと考えることができます。反対に、2回の調査で生徒評定、教師評定ともに最も低かったのは「拒否」でした。すなわち「断ることや、他者から無理な働きかけにやめると言うことができない生徒が若干多い」ということを示しています。今後、こうした生徒を減らしていくためには、協同学習スキルのうち「自分の嫌なことを断ることができる(コ

コミュニケーションスキル中学校段階 24)」や「困ったとき、誰かに手助けを頼むことができる（コミュニケーションスキル高校段階 31）」などに焦点を当てた指導を、その指導に適した単元・題材の授業の中で行うことが有効ではないかと考えることができます。

このように、協同学習による授業改善を繰り返すことによって、生徒のコミュニケーション能力は向上させられる可能性があります。また、こうしたコミュニケーション能力は変化の激しい今の時代を生き抜くための力を育てること、つまりはキャリア発達を促すこともできると考えられます。